

## 追悼高橋康雄先生

張 偉 雄

高橋康雄先生は、札幌大学において、わたしに深い印象を残してくださいました先生です。

文化学部乃至大学の運営に先生は惜しまずに自分の精魂を注いできました。大学の専任教員として、まっとうすべき三大仕事、教育、研究、行政運営の何一つも、献身的に自分の力を捧げてくださいました。

教育の面において、「現代メディア論」、「近代児童文学論」、「現代ジャーナリズム論」、「広告文化論」および「ゼミⅠ」「ゼミⅡ」などを担当なさって、中身の濃い授業をもって学生の高い評価を得ています。また、学部生の比較文化研究の指標ともなっている、「比較文化のコンセプトと参考文献」を編集し、比較文化のポイントとなる71項目のキーコンセプトと、その研究に欠かせない71項目の参考文献を学生に提示しています。その功績はこれからも学生の研究活動によって讃えられていくに違いないと思います。

研究の面においては、簡単に検索しただけでも、先生が自ら執筆なさった著作が32冊、論文が43本に上ります。去年一年だけでも、先生は、著作を三冊出されました。これらの数字から見ても、先生の築いた書物の世界に私たちは一様に感服するものでありましょう。

行政の面において、先生は、文化学部の学部長として、大学の教学評議員として、授業や研究の傍ら、毎日のように、一連の会議に出られ、大学の改革に自分の知恵と労力を捧げてこられました。

高橋先生は、もの静かな方であります。しかし、教育者として、研究者として、行政の長として、先生は猛烈に自分自身を燃やしてきました。このような生き方には、先生の哲学が入っているように思います。99年春のことです。夕方仕事が終わって、大学の近くの居酒屋に飲みに行った帰りに、先生に、「こんなに仕事が忙しいのに、どうやって研究の時間を確保できるのですか。」と尋ねましたところ、先生は「時間はみんな同じように持っているもので、何かやろうとすれば、時間は出てくるのですよ」と淡々とおっしゃいました。「忙しい」という言葉を一度も先生の口から聞いたことのないわけが、わたしが「やろうとすれば、時間が出てくる」という言葉によって、とっさに悟りました。先生のこのことばを、わたしたちは力の源にするものではないでしょうか。

長いマスコミ、文筆活動を経験したあと、高橋先生は、大学に仕事の間を変えました。学問の殿堂と称している大学に、高橋先生は、立派に自分自身の存在意味を示してくださいました。倦怠感の漂っている二十一世紀の日本の大学に、民間人を起用する意味はここにあるのではないかと高橋先生の自ら進んで仕事を見つけてやっていく姿を見て、わたしは強く思うようになりました。

私の印象の中で、高橋先生の生活スタイルは、質素なそのものであります。中国の文学者、魯迅は、牛を高く評価しています。魯迅の言うには、牛として、「食べるものは草であるが、出てくるものはミルクで

ある」。牛は贅沢な求めはしません。食べるものは、草だけであるが、しかし、貢献するものは、高価なミルクであります。高橋先生は贅沢な生活を何も求めてはいませんでした。しかし、学問研究の分野において、示唆に富む高価な成果を数多く残してくださいました。

中国の六朝時代を生きた曹操の息子曹丕は文学の効用について、「蓋し文章は経国の大業にして、不朽の盛事なり」と書いています。つまり、人間の寿命には限りがあるが、文章は永遠の生命を保つものであります。故に、昔の文章家は、歴史家のことばを借りることなく、また、権力者の力によることもなくして、名声は自然と後世に伝わったのだという意味であります。札幌大学を愛し、文化学部 of 成長に心身とも捧げてこられた高橋先生も、自らの著作とともに、永遠に後世にその名が称えられていくことと、わたしは確信しております。

書物を書くことの大好きな高橋先生が、天国において、さぞかし心の行くままに、筆を振るい続けることでしょう。高橋先生のご冥福を心よりお祈りして、わたしの追悼のことばとしたいと存じます。

（この文は西暦二千年七月十一日に行なった高橋康雄先生の追悼会にて御霊前に捧げたものであります。）